

海城中学高等学校



株式会社ドリコム 代表取締役社長

内藤 裕紀 氏

1978年生まれ。1997年海城高等学校卒業。京都大学在学中の2001年に有限会社ドリコムを設立。ブログサービスなどインターネットサービスの提供で業績を伸ばし、2006年に東証マザーズ上場。現在はソーシャルを軸としたスマートフォン向けコンテンツの提供を進めており、会社の存在意義である「人々の期待を超える」新規性の高いサービスの提供に取り組んでいる。

ません。その意味でも、クリエイティブを養うことはとても大事です。本校ではそのことを体験的に学ばせるために、いくつかの特徴的なプログラムを導入しています。中2と中3で取り組んでいる「ドラマ・エデュケーション」もその一つです。これは演劇的手法を取り入れた授業で、たとえば班ごとに他者からの「聞き書き」に基づいてシナリオを書いてドラマを演じ、その一連の作業を通して人間関係力や創造的な力を養っていきます。中3の生徒は、平田オリザさんの弟子筋に当たる一流のアーティストさんに授業をデザインしてもらい、教えていただいています。一流のアーティストには、日ごろ接している大人とは違うオーラがありますし、独創的な発想にも触れられます。もちろん、いくら独創的でも演劇ですから、観客に

伝わらなくてははいけません。そういう訓練を受けることが、生徒たちには大きな経験になっています。
内藤 一般の中学生、高校生が一流の人と触れ合う機会は、そうはないと思います。私が自分で会社を立ち上げようと思ったきっかけは、高3のときに経済関連のシンポジウムに行つて、目の前で一流の人たちが話しているのを見たからです。それが刺激になりました。
中田 内藤さんは高校生のときから『日本経済新聞』を読まれていて、新聞社などが主催するシンポジウムに自ら足を運んでいたそうですね。これは同じ年代の生徒たちにとって驚きだったと思います。
内藤 でも、それは単に参加を申し込むだけのことですよね。問題は、それをするかどうかです。何でもそうだと思いますが、「一歩踏み出し

たら、世界が開いている」ということです。
「あれができたから、これでもできる」成功体験が次の自信に
中田 内藤さんは、本校がまだ高校募集を行っていた時期に、公立中学から海城高校に入られました。中学時代は陸上部だったそうですね。
内藤 陸上部とはいえ、最初は他の生徒がトラックを6周回るところを、5周ぐらいいしか回れませんでした。そういう不甲斐ない自分が嫌で、一生懸命に朝練をして、地区大会で優勝できるまでになりました。いつも周回遅れで走っていた自分が一番を取れた。その経験が自信になって、次の大きなハードルに向かうとき、「あれができたから、これもできるだろう」と思えるようになりました。成功体験は、宝くじのように「いきなり当たる」というものではないと思います。小さいことの積み重ねです。四苦八苦して、ダメ出しをされて、それでも何とか形にしていける。そういう経験が大事だと思います。
中田 講演についての生徒たちの感想文を読むと、内藤さんの「自らタガをはめない」という言葉も印象に残ったようです。「自分はこれだけの人間だ」というように自己規定をせず、「あれができたから、もっとできるかもしれない」と考え、常に

前向きに挑戦することが大切です。生徒会活動でもクラブ活動でも、たとえ成功しなくても、力を出し切る経験を積み重ねていく。その履歴が自信になっていくのだと思います。
 これからの日本社会はクリエイティブイティと同時に、リスクテイクが必要になってきます。「できる前提で物事を考えると世界が開ける。今の時代の日本では、一歩前に踏み出しても死ぬことはないのだから」という内藤さんのお話に感動した生徒は多かったです。
内藤 ビジネスの上でリスクを取っても死ぬことはありません。開き直つて考えれば、本当の意味でのリスクなんて、何もないといつてよいでしょう。逆に、「やらないことのリスク」のほうがどんどん大きくなっていきます。
 私は今年初めて、東京マラソンに出てフルマラソンを走りました。中学で陸上をやったくらいで、完走できる根拠も何もありませんでしたが、とにかく走り切る。走り切ると自分の中で、「あれができたから、これもできるだろう」と、今でも同じように思います。
取材重視の探究型学習で課題設定・解決型の学力を養う
中田 海城高校を卒業後、京都大学に進んでから起業し、パソコンを教

SPECIAL TALK

株式会社ドリコム
代表取締役社長

内藤 裕紀 氏



海城中学高等学校
校長特別補佐

中田 大成 先生



一步踏み出せば 世界は開いている

「新しい学力」「新しい人間力」とは?

独自の
21世紀型
教育で培う

社会の複雑化、グローバル化の進行に対応し、2020年度から導入される予定の新しい大学入試では、知識量だけでなく、問題解決力や主体性、多様性、協働性などが重視されている。すでに20年以上前からこうした時代の要請を先取りし、教育改革に取り組んできたのが海城中学高等学校だ。同校の卒業生でドリコム代表取締役社長の内藤裕紀氏が語る体験談や人生哲学は、そんな同校がめざす教育としっかり響き合う。今、求められる教育とは何か。内藤氏と同校校長特別補佐・教育推進研究センター長の中田大成先生に語り合ってもらった。

雪だるまを転がすように
人生は経験を積み重ねるもの

中田 内藤さんには昨年秋、本校のキャリアガイダンス講演会で講師を務めていただきました。ご自身の体験談を中心に、大学時代に起業し、広く活躍されている現在に至るまでを熱く話してください、生徒たちには大きな刺激となりました。特に「人生は雪だるまを転がしていくようなものだ」という言葉に象徴される、人は小さいことでも、その経験が積み重なっていくことで成長していくのだというお話は、とても印象的でした。当日は小学校時代のことから話してくださいましたが、小学生のときに郵便局の貯金箱コンクールに応募したことが、原体験としてあるとのことでしたね。
内藤 ものをつくる楽しさに魅せられ、毎年夏に貯金箱コンクールに応募していました。何度かつくろうちに入選することができたのです。それが「新しいものをつくって称賛される」という最初の体験になりました。私は自分の会社について「発明を産み続ける会社になりたい」と言っています。その思いの背景には、やはりこの経験が原点としてあると思いますね。
中田 これからの時代、イノベーションを起こさなければ、うまく経済が回らないし、日本の未来もあり



海城中学高等学校 校長特別補佐

中田 大成 先生

える家庭教師の派遣サービスを始めたそうですね。しかし、結局クライアントはつかなかったとか。これは一つの挫折経験ですね。

内藤 当時、Windows 95が広まっていたので、これからはパソコン需要が増えるだろうと思って、自分で考えて分厚い企画書を作り出した。でも、頭の中で考えていたことと、実際にやったときの違いが大きかったわけです。やらないとわからない。だから、まずやってみる。やってみて、学んで前に進む。その繰り返しです。講演のときも話しましたが、受験勉強における重要ポイントが、三つあると思っています。一つは、自分は何ができないのかを考え、問題を設定すること。二つ目は、どうしたら学力が向上するか、その解決法を見つけること。三つ目は、それを実行していくこと。問題を設定す

として迎え入れ、お互いに異なる体験を共有させようということ、2011年度から帰国生入試を導入しました。帰国生を各クラスに均等に入れることで、学内のダイバーシティを高め、異質なものに対する寛容性を育むと同時に、多様な発想やイノベティブな発想を引き出そうというわけです。

また、本校では中1と中2で「プロジェクト・アドベンチャー」という体験学習を行っています。さまざまなアクティビティに挑み、仲間とともに課題を解決していくことを通して、コミュニケーション能力やコラボレーション能力を高めていくものです。内藤さんがおっしゃるように、イノベティブなものにはただ多様な人間がいれば生まれるというものではなく、お互いをよく理解したうえで良いところを引き出し合うことが必要です。それが1+1+1が4や5になっていくような高いパフォーマンスにつながります。「プロジェクト・アドベンチャー」はまさに、そのことを体験的に学ばせるために導入したプログラムです。

「人のために何ができるか」社会貢献して、その自己実現

中田 内藤さんは4年前にギランバレー症候群という難病で入院されています。そこから見事に復帰され、

る力、問題の解決法を見つめる力、解決法を実行する力、その三つが重要だということを受験勉強のときに学びました。この三つの力は、社会に出てからも必要になりますね。

中田 求められる学力が、知識獲得・定着型から、自分で問題を発見し、課題を設定して解決していく課題設定・解決型に変わりつつあります。本校では20年以上前から中学の社会科で、自分で設定した課題を調べてレポートにまとめる探究型の総合学習を行っています。そのま



それ以降は心境が変化したというお話にも生徒たちはたいへん感動していました。

内藤 ギランバレー症候群というのは筋肉を動かす運動神経の障害で、急に手足に力が入らなくなり、体が動かなくなってしまう。若い人がかかると進行が速く、私が入院したときにはもう目と口しか動きませんでした。入院している間は、病院に役員が来て、病室で経営会議をしていました。医師からは「回復するかもしれないけれど、もしかすると寝たきりになるかもしれない」と言われていました。

入院中は、復帰できたら何をしようかとずっと考えていました。会社については、自分がいなくても、新しい発明が回り続けるようにしたいと思っていました。そして利益にならないことであっても、「自分が復帰し

会社内だけで教育のアプリをつくっても、それだけで商品になるかどうかはわかりません。学校に直接行って、どのように生徒たちがタブレットを使っているか、どこにつまずいているかなどを見ます。そのときに、大事なものはIT化することより、どうすれば学びのモチベーションを上げ、学習を継続させるかだということに気がきました。これは問題の設定能力だと思っています。やっていることは、中学生の皆さんと変わりません。学校で論文を仕上げていく、その力の積み重ねの先に仕事での活躍があると思います。

多様な価値を認め合う環境を日々の学習空間の中につくる

中田 会社では、海城時代の同級生も一緒に仕事をされているそうですね。
内藤 高2、高3のときに同じクラスでしたが、私は京大に入り、彼は東大に入って、違う会社に就職しました。彼が転職を考えているときに、私が誘いました。実は、明日も東大に行つて弁護士になった同級生と集まって食事をする予定です。馬鹿なことをやって楽しく過ごしていた、その関係が20年経つてもずっと続いています。そこが男子校の良さですね。

たことで、何かしら社会に貢献できることがあれば、やる意味がある」と考えるようになりました。昨年、海城高校で講演をさせていただいたのは、新経済連盟の「新経済人育成プロジェクトチーム」の活動の一環です。この活動を行つても、私にも会社にも金銭的な利益はありません。でも、自分が高校生るとき、経済関連のシンポジウムで話している人を見て刺激を受けたように、私の話を聞いて、一人でも気づきが出てくれば、意味があるのではないかと思っています。

中田 内藤さんのお話が、ベンチャービジネスの成功談だけに終わっていたら、おっしゃったような気づきを生徒たちは持たなかったと思います。どんなに成功しても、それが何らかの形で社会に貢献するという利他性がないと、本当の価値がないということに彼らは気づいたと思います。
内藤 お金をたくさん持って、いいものを食べてもたかが知れていますが、それよりも、多くの人のために何ができるかを考えたほうがいいかと。そうすれば、するべきことがたくさん見つかり、結局は自分の人生がより豊かなものになります。アメリカの企業家は、成功している人ほど寄付やボランティア活動に積極的です。カッコいいなと思いますね。

中田 彼はコンサルティング会社に入っていましたから、今はその経験を生かして仕事をしています。同じような人が集まるより、違う体験をしてきた人たちが同じチームに集まったときこそ、掛け算になって大きな力になっていきます。ダイバーシティ(多様性)というところ、さまざまな人種や国籍、年齢の人たちがただ集まればいいと思われがちですが、そうではありません。国や宗教、価値観などが違う人たちがお互いに理解し合つて、初めて真の意味でのダイバーシティが生まれるのです。
中田 本校では2010年まで高校募集を行っており、内藤さんのように公立中学から生徒を迎えています。中学で違う体験を持った生徒たちを迎えることで、違う者同士を一緒に環境で育てたかたからです。多様性を学習環境の中に設定したのは、公立と私立の生徒の質の差があまりなくなってきたからです。

Profile

海城中学高等学校

1891年に海軍予備校として創立された伝統ある男子進学校。「国家・社会に有為な人材の育成」という建学の精神の下、リベラルでフェアな精神を持った「新しい紳士」の育成に取り組んでいる。特に創立100周年を機にスタートした教育改革では、価値観の多様化やグローバル化が進む社会で必要とされる「新しい人間力」と「新しい学力」の育成に力を入れている。このため、課題解決型のアクティビティに取り組む「プロジェクト・アドベンチャー」や、演劇的手法を用いた「ドラマ・エデュケーション」など、独自の体験型プログラムを導入し、これからの時代に不可欠となるコミュニケーション能力やコラボレーション力を育成している。また、問題解決型の学力を養うため、理科では実験・観察に重きを置いた授業を行い、社会科では探究型総合学習を導入。中3の生徒に対しては卒業論文の作成にも取り組ませている。2011年からは帰国生入試を本格導入。翌年にはグローバル教育部を発足させ、英語力アップを図るプログラムも充実させている。例年、国公立大、難関私立大を中心に進学実績は好調で、特に近年は医学部の進学希望者が増加し、医学部に高い合格実績を誇る学校の一つにも数えられている。

(注) 記事中の製品名はメーカーの商標です。